

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）平成 28 年度教育研究報告書

| | |
|----------------------------|--|
| 事業課題名 | オムニバス「戦争と植民地めぐる歴史認識問題」 |
| 代表者名 | 小山哲、高嶋航 |
| 事業概要 (600 字程度) | <p>ASEAN や東アジアとの学生交流にあたっては、20 世紀に起きた戦争と植民地の問題に関して正確な歴史的事実を把握していることがきわめて重要である。昨年度に引き続いて、東アジアの日、中、韓・朝間での「歴史認識問題」を中心とし、焦点となっている問題にかかわる過去の歴史についてより正確な事実を学ぶことを主としつつも、これら三国の間での歴史認識の差異を多面的に考察するとともに、ヨーロッパ・ロシア・アフリカ・中東の事例とのグローバルな比較の視点を導入することにより、より広く現代世界における「歴史認識問題」とくに過去の戦争や植民地支配の記憶をめぐる問題について考える手引きとなる講義をオムニバス形式で提供した。</p> <p>事業実施にあたっては、以下の教員が講義を担当した。文学研究科：平田昌司・小山哲・永原陽子・吉井秀夫・高嶋航・松田素二・中村唯史・谷川穰；教育学研究科：駒込武；人間・環境学研究科：江田憲治・岡真理；人文科学研究所：石川禎浩。本ユニット参加部局である文学研究科、教育学研究科、人文科学研究所の教員のほか、人間・環境学研究科からも授業提供を受けたほか、外部講師 1 名を招聘した。また、全回にわたり TA を雇用して、授業準備を円滑におこなえるよう配慮した。</p> |
| 成果の概要 (800 字程度) | <p>本講義は、文学部・文学研究科のアジア研究特殊講義として開講したのみならず、研究科横断型教育プログラム (A タイプ) としても提供した。すべてをあわせた履修登録者は 100 名を超えた。実施にあたっては、講義 1 回ごとに内容をふまえた感想・疑問点を記したコミュニケーション・シートの提出を全学生に求め、代表者・講義担当者がその内容を共有し、参加者の認識が深まっていく過程を確認した。評価にあたっては、講義担当者 12 名の講義から 3 項目を履修者各自が選んでレポートを提出し、出席点と合わせて成績を決定した。講義は小山哲「ポーランド・ドイツ・ウクライナ——国境を越えて歴史認識を議論するには」、高嶋航「歴史認識をめぐる中朝韓の論争から考える」、永原陽子『『ダーバン会議』と植民地をめぐる歴史認識』、平田昌司「近現代中国における日本観」、吉井秀夫「朝鮮総督府古蹟調査事業の評価をめぐる」、中村唯史「ロシア文学におけるコーカサスのイメージ」、松田素二「朝鮮人被爆者と戦後補償問題」、谷川穰「靖国神社について」、駒込武「台湾近現代史における日本の植民地支配問題」、江田憲治「＜民族協和の理想国＞か？＜帝国日本の植民地＞か？——「満洲国」をめぐる歴史認識」、岡真理「歴史的鏡像としてのパレスチナ／イスラエル」、石川禎浩「日中国交回復時 (1972 年) の歴史認識」、池内敏「竹島・独島問題をめぐって」を実施し、アジアにおける戦争・植民地問題のみならず、ヨーロッパ・アフリカ・中東も範囲に含めて、歴史的事実を正確に伝えるように努め、今後海外での学習研究・就業の機会を持つ可能性のある学生にとって、きわめて有益な知識を学ぶ場となった。本事業課題は、その重要性にかんがみて、平成 29 年度も継続する。</p> |